

「多動」、「字義拘泥」といった「症状形成」の問題に留まらない。自己意識や主体性、母子分離や仲間体験、性をめぐる混乱など、広く「人格形成」にまつわる課題をも視野に入れたものとなっている。全体の基底部に、「甘え」の普遍的重要性を説いた土居健郎の仕事へのリスベクトが流れている。

私はこの五、六年、著者の仕事に継続的に触れてきたが、著者のエネルギーは「仮想敵」（既存の発達障碍論）とどう戦うかに注がれているものだと、つい先ごろまで思っていた。だが、本書を含む最近の著作を読むうちに、少し違うような気がしてきた。著者の力点はもう、そんな局地戦には置かれていない。もっと広く、臨床精神医学全体に向けられているのではないか。著者は「子どもと養育者のこころのつながりをいかにすれば取り戻すことができるか、という一念で」本書の筆をすずめたというが、その射程は実は、現在の精神医学そのものをも含んでいると言えるだろう。「個」の「行動」にばかり着目している精神医学に「こころそのもの」を見る姿勢と

技術を取り戻す。著者の近年の精神的な活動は、その思いに突き動かされているのかもしれない。行間から、怒りや嘆きや希望が緋い交ぜになった、著者の「力動感」に満ちた声が響いてきそうである。こんなことでは精神医学は息を止めてしまおうぞ。

本書は著者の仕事が発達障碍という特定領域を超えて、人間の自己

●驚見 聡著

## 『発達障害の謎を解く』

自閉症という独立した精神疾患名が誕生してすでに七〇年あまりが経過した。しかし、自閉症をはじめとする発達障碍の理解についてはいまだに錯綜した事態にある。環境因か器質因かという原因論をめぐる混乱だけではない。診断名とその基準さえ一〇から二〇年毎に変更が加えられ、いまだに定着する兆しが見えない。なぜこれほどまでに時計の振り子のような大きなぶれが生まれるのか。その要因を振り返るなかで、昨

形成一般の問題、および精神科臨床全体を論じることへと本格的に踏み出したことを告げるものである。本書に続けて刊行された『あまのじやくと精神療法』（弘文堂、二〇一五）が、その歩み具合を確かに示している。

内海新祐

（うつみ・しんすけ／川和児童ホーム）

今の研究知見を取り上げながら「発達障害の謎」を懇切丁寧に解き明かそうと試みたのが本書である。

発達障碍に関する議論は、ややもすると「障害か個性か?」「治るか治らないか?」「遺伝か環境か?」「という二者択一的なものになりがちだが、著者は、先天的要因（遺伝要因）か、それとも成育環境（環境要因）か、という従来のどちらから一方に決めつけようとする考え方から脱皮し、双方の要因のダイナミックな

絡み合いの解明こそ、今求められている課題だと説く。

その根拠となつているのが、最近の遺伝子研究の成果である「エピジェネティックス」という考え方である。これまで自閉症に限らず多くの疾患の原因を論じる際に「遺伝か環境か」という二者択一の議論が多かつた。それを支えていたのが、遺伝要因は変化しないという通念であつた。しかし、環境要因が遺伝子に影響を与えて、その働きを変化させるということが最近の遺伝研究で明らかとなつた。それがエピジェネティックスというメカニズムである。

「ある種の遺伝子にはその働きをコントロールするスイッチに相当するものがあり、その切り替えによつて遺伝子の働き具合が変わる。このスイッチの切り替えを行うのは「環境要因」で、遺伝子本体を変化させずに働き具合のみを変える。エピジェネティックスの発見は、遺伝要因と環境要因が合わさつて機能するシステムが存在すること、遺伝子機能が後天的に変わりうることを、初めて証明したのである。」（五三頁）  
たとえ病気の関連遺伝子であつて

も生育環境によって、遺伝子のスイッチがオンにもなればオフにもなる。よって、それを左右する環境要因を検討することも重要だと著者は力説する。

発達障害に対する原因論に新たな切り口を提起した本書の最大の特徴は、ひとつには先の遺伝子研究という微視的観点であるが、それに加えて疫学研究という巨視的観点をも併せ持つて論じていることである。原因論をめぐってこれまで大きくぶれて、とりわけ必要とされる観点である。

著者は小児科医として遺伝性疾患の診療と研究に従事しながら、(おそらくは)遺伝子研究で医学博士号を取得したのであろう。基礎と臨床、双方の研究に通暁している著者だからこそなされた仕事である。

この数十年間発達障害研究では、脳(機能) 障害仮説が堂々とまかり



日本評論社 2015年  
2000円(税別)

通ってきた。国内外問わず権威ある教科書を紐解くと、発達障害に関する項目では、「生得的な脳障害を基盤とする(発達障害)」といった類いの枕詞を必ず目にしてきたものである。いまだ仮説でしかない原因論の流行を盲信することなく、広い視野から地道に検討した上で誰にも分かりやすく解説した本書は、今後の発達障害理解の行方を占う際のひとつのエポックメイキングな仕事となるかもしれない。

ただ評者の立場からひとつだけ期待を込めて注文したいことがある。素質と環境とのダイナミックな絡み合いの解明こそ今後の課題だと主張する著者であるが、なぜか乳幼児期早期における(子ども「養育者」関係の内実にはまったく触れていない。評者はここに過去の短絡的な母原病説の弊害を見て取ってしまう。発達障害という病態が顕在化した後にしか出会うことのない臨床医は、それまでの発達過程で何が起こったのか、そのことをこれまでブラックボックス化し、積極的に見ようとしてこなかったのではないか。子どものこのころの成長発達ないしは病態

の成立過程こそ、素質と環境のダイナミックな絡み合いである。そこに目を向けることこそ、著者を含めた臨床研究者に今切実に求められているのではないか。それは臨床従事者

●齋藤 環著

## 『ビブリオパイカ』

この本は、一九九七年から二〇一四年までに新聞や雑誌に掲載された齋藤環さんが書いた三六七冊分の書評(文庫解説も含む)集大成である。新聞・コラムなどに発表した短評のものから、文庫の解説・雑誌の論文のような長いものまで色々入っている。

齋藤さん自身の著作を比較的一生懸命読んできた私としては、どんな本を書評しているかについて興味津々だった。リアルタイムで読んでいる書評も多いと思っていたが、あにはからんや、未読の書評がかなりの量ある。

しかも、「ええつ」と声をあげてしまうような書評もいくつかあつ

にしかできない課題だからである。

小林隆児

(こばやし・りゅうじ/西南学院大学人間科学部)

た。たとえば「石原慎太郎」の小説についての書評や文庫解説には驚いた。私自身もいわゆる「イデオロギ一的反発」で偏った読み方をしていたのかもしれない。政治家としてのイメージが強すぎ、またそれへの疑念が強すぎて、一面的なとらえ方でしかなかったのかと思う。たしかに齋藤さんの指摘している「中心気質者」という視点で捉えれば、もっと多面的に彼をみる事ができるのだと教えられた。とはいっても、彼をなかなか好きにはなれないのだが。

ときどき、知識人や専門家への警鐘とも思えるような「虚を突く」ような解説のものもある。著者への敬